党派型学生運動の終焉

代行主義の否定として

西田弘和

一　党派活動の枠組み

既に、新左翼諸党派は、その影響力もそして意味さえも喪失しつつあります。ですから、今日ではもはや一般的な批判の対象でさえありません。（現実の運動過程で彼らが介入して来る時は、彼らが微々たるものとはいえ組織と物理力を有している以上、個別の状況性においては問題とはなりえますが。）

かつて六〇年前後において、既成左翼が戦後民主主義の幻想へと埋没し、体制に対する批判能力が失なわれてしまった段階で、新左翼の運動が提起され、実践されました。それは、きわめて当然なことであり、また正当なことであったといえましょう。そして六〇年代において、彼ら新左翼諸党派は、四分五裂を遂げながらも一つの批判グループを形成していました。

しかし、彼らが自負し、また一般にも流布されていた「唯一の」批判グループとしての権威は、大衆運動が形成されるや一挙に崩壊してしまいました。学生大衆によって形成された全共闘運動は、党派が創立したのでも、また彼らの指導によって導かれたのでもありません。大衆運動が展開した実践的体制批判は、党派の百の能書きにもとづく批判をのりこえ、10・8羽田（一九六七年）の実力闘争の地平を一挙に前進させました。

自然発生的な大衆運動が、目的意識的な党派運動のはるか先を進むという、彼ら党派諸君の想定からはあってはならない現実を前に、彼らはかつて多くの革命において左翼政党が行なったように、理論をつぎはぎし、政治技術を駆使して、つじつまを合わせようと「努力」しました。この時に、どうもあまりの性急さの故に、自らの批判能力をどこかに置き忘れたようで、全国全共闘連合の結成（一九六九年）でなんとか表面上のソロバンを合わせましたが、左翼としては全く無節操な存在になり果てました。

諸党派にとってもっとも致命的だったことは、大衆が、諸党派の批判能力や指導力を決っして自分たちより数段まさったものではなく、むしろ前衛を称する者たちが後衛でしかありえないこともあるのだということを了解してしまったことです。そして、さらに悪いことには、党派は運動の後退局面に当って運動の後退を阻止しようとするのではなく、自党派の組織防衛と努力の保持に力を注ぎ、学園を人狩り場として振るまったことです。確かに彼らの組織は残りました。しかし、運動は根底から解体されてしまいました。

これが窮余の一策とでもいうのでしょうか。我々が注目すべき点は、全共闘運動の前と後とでは、党派の学園でのあり方は基本的には何ら変わってはいないということです。彼らは全共闘運動という戦後日本の反体制運動の重要な一つに数えあげられる運動（これには誰も異論はありますまい）を経験したにもかかわらず、彼らは、運動として、何の成長も遂げなかったということです。彼らが長年主張してきた理論と実践の相互媒介、統一といった題目は、全く無効であったことです。

党派はバリケードが撤去され、封鎖が解除され、「正常化」されていく学園の中で、体制の秩序に何のためらいをもつこともなく迎合したのです。ちょうど、全共闘運動が起こった時に、それまでの彼らの主張を投げうって運動に迎合したように。

だから今日、党派が日共＝民青と同様に学園管理の一翼を担い、叛乱の抑圧者、阻止者として立ち現われているからといって、別に首をかしげる必要もないのです。かかる顛末に立ち至った以上、もはや、左翼諸党派は学園そして学生運動に対し、状況を切り拓くような如何なる提起もなしえないでしょう。

現在の学園では政治的な無風化が強調されていますが、かかる認識はたいして気に止めることもないでしょう。党派が日々にくり返すような教訓によって叛乱が起こるなら、もっと無数に叛乱は起こっていなければなりません。叛乱は、予定調和の要素だけで構成されるわけではありません。（決っして、タナボタ式に待っていればよいと言っているわけではありません。）

ではまず、かかる党派運動のもつ否定的性格を述べ、次いで現段階での運動の在り様を概観してみましょう。

二　擬似代行としての政治党派の本質

今日、新左翼諸党派が好んで頻繁に用いる用語の一つに「領土」なる言葉があります。それは自らが大衆に対し、「代行的立場」にあることを主張しています。即ち、大衆運動の未成熟性―自然発生性を、「前衛」の「鍛えられた」組織―目的意識性によって導くために、大衆運動を彼らの運動をもって代行し、さらには単に代行するにとどまらず、愚かで無知な大衆を導くというわけです。

しかしながら、かかる意識は彼らの傲慢さからする思い込みにすぎないと言えましょう。実際には、彼らはブルジョア政治屋たちと同様に、民衆の意識を代行しているとは言い難い存在です。そして民衆は、ブルジョア政治屋たちに何も期待しないように、新左翼諸党派にも、彼らが思い込んでいる程にも期待してはいません。

代行主義はとりわけロシア革命以降顕在化した問題の一つです。それは、大衆組織（ソヴィエトや労働組合など）に対して党＝官僚集団が敵対的努力として登場し、その後の革命過程で新しい支配階級を形成した事実のうちに見取られるものです。組織的代行は、運動上の代行を必然化するが故に人間の解放闘争への敵対的矛盾として立ち現われているのです。代行主義とは、今日のブルジョア社会の現実態であり、「左翼」代行主義とは政治的意味内容におけるその「左翼」的完成形態です。そして代行主義は、人類史を階級闘争の場として必然化

して来た運動の総過程に物質的基礎を与えて来た政治的構成体の意味内容だと思います。

代行制度は、統治機構に不可欠なものとして形成され、また代行制度が統治機構を生み出し可能にしているともいえます。

ブルジョア民主主義はその初めより、自らが代行制度を実現することを主張してきました。その意味では、近代ヨーロッパ社会は神権の代行としての統治から、民衆の意志の代行としての統治という概念上の転倒とともに始まったとも言えましょう。しかし、今日までに明らかなことは、万民の意志の代行が理念にしかすぎなかったということです。支配階級は、自らの権益のために代行の名目のもとにその権力を行使し、民衆を操作するのです。逆説的にいうなら、今日の社会における政治的代行の主張は、同時に、代行の否定としても機能するのです。その意味で、パワーエリートの集団の政治的基盤は、かかる場面にこそ端初を有すると言えます。

では、何故に代行を実現するはずのブルジョア民主主義が、その実際において民衆の意志と断絶して社会的機能を果たすのでしょうか。それは、社会運営の複雑化・繁雑化といった事態にこそ負っています。それらは交通型態の発達によってもたらされたと共に、統治機構、および支配階級内での権益の保護といった手続きの繁雑化によってもたらされていると言えましょう。

ウェーバーは、「職務活動、少なくともいっさいの専門化した職務の活動――そしてこれはすぐれて近代的なものであるが――は、通常、つっこんだ専門的訓練を前提する」と『官僚制』で述べています。では、かかる制度はどのようにしたら廃棄できるのでしょうか。ウェーバーは、すでに廃棄不能の制度とみなしているようですが、同時に、規律は文書に優位するという立場から、バクーニンの文書廃棄の主張は官僚制を破壊するに至らないだろうと述べています。官僚制そのものが、かかる形式の破壊による崩壊を自己に荷していない以上、ウェーバーの批判はその意味で正当なものといえましょう。

しかし、革命が公―私の二重性の揚棄として要請されるといった観点からは、ウェーバーの認識はなお批判されねばなりません。「公私の区別」は、「官僚制における職務遂行の完全な非人格化と法の合理的体系化とによってはじめて原理的に貫徹された」（同右）。近代ブルジョア社会において公民的性格および私人的性格は、対象化された疎外態であり、これこそが近代市民社会と政治的国家における人格の態様なのです。規律とは、官吏の服務規律を意味します。それは即ち、服務すべき対象の目的性を破棄することによって、さらに付言するならば公民的性格を揚棄することによってのみ廃棄されるのです。また、このような代行は、公衆なる概念とその社会が大衆間の諸力の均衡によって主要には支えられているという、ブルジョア・イデオローグたちの主張によって保護されています。

同様に「主権在民」という憲法の規定は、民衆の意志均衡によって主権が成立するとしているわけです。既成左翼は憲法のかかる規定を前提として問題を組み立てていますが、それがタテマエにすぎないことは彼らが政争や選挙の度に駆使する組織戦術や大衆操作によって了解されているはずです。このように、ブルジョア民主主義の幻想は、社会が大衆によって達成された均衡によって支えられるものであるというイデオロギーに拠っているのです。さらに、今日の既成左翼は、

このイデオロギーを自らの官僚制的本質において補完しているのです。既成左翼は今日の、支配階級と被支配階級との階級的対立を隠蔽する機能を担いつつあると言えます。

今日の世界は、東西両陣営を問わず、支配階級間相互の均衡と、さらに個別支配階級と大衆との均衡の二重性のうちに打ち建てられ、大衆間の均衡はマス・メディアを介して操作され、大衆はより一層の単子化を要請されるのです。

経験的に指摘されるように、階級的な意味でのプロレタリアートの独裁は、未だどこの地域においても樹立されておりません。プロ独がタテマエに終わり、党独裁のみを結果している社会でもブルジョア社会と同様のことが看取されます。即ち、プロレタリア独裁下においてはプロレタリアート間の均衡によって国家が支えられているという論理です。そこでは巨大な官僚制機構がすべてを決定し、大衆を操作しているのです。そこでは、官僚制的「官庁」と官僚制的「経営」がより一層強化されており、各種職務の専門化、複雑化が要請されています。そしてそうした機構総体が、被支配階級的権益を抑圧する機能を果たしているのです。

三　階級形成と運動の現段階

これまでの左翼運動は、運動の蓄積―叛乱の継承を果たし得ませんでした。新左翼諸党派は、階級形成を彼らの主張とはまったく逆に、疎外しました。（これらのことは、多くの党派において下部活動家が消耗品として扱われて来たことに一例を見ることができるでしょう。党派の継続は多くの下部活動家の犠牲の上に遂行されてきました。ある意味で、かかる組織維持が必然化されることもあり得るのかもしれません。しかし、それでもなお下部活動家の入れ替えを運動のサイクルとして構造的に必然化している組織が、階級形成をそのサイクルのうちに組み込めるわけがありません。大衆は、党派が消耗品として扱っている下部活動家のように入れ替えの出来る存在ではないし、また、下部活動家が党派をやめるように、大衆は大衆であることをやめるわけにはいかないのです。）

そして諸党派によって大衆運動にもち込まれた党―大衆構造論は、意識と実体の両側面から大衆分断をもちこみ、階級形成を阻止し、叛乱の芽を抑圧するのです。ある意味で、被抑圧大衆は抑圧階級に対して党派的な存在であるし、また党派的―階級的であらねばなりません。しかし諸党派は、階級形成を自党派の拡大としてわい小化したのです。

支配階級に対し党派（階級形成）的であること、即ち左翼的であるとは、人間の解放に如何に寄与するのかということによってのみ度量されるのです。では何故、かかる転倒が生起するのでしょう。それは、党派が現段階の支配階級と大衆運動の力関係を運動水準の問題としてよく理解していないことによります。彼らはそれを図式主義的に理解しているにすぎません。

即ち、今日の運動水準は管理体系の安定という状況に規定された抵抗戦の段階にしか位置していないということです。かかる認識があれば、攻勢段階にあるかのような党派による無分別に革命的空語をまき散らすような馬鹿な真似はできないでしょう。

全共闘運動は、国家権力との非妥協的な空間的な対峙的局面を構成しました。これだけは確信し得る事柄だと思います。そこで展開され

た国家権力の下位管理体系としての大学当局を徹底的に撃つことによって管理体系綜体の動揺を深化させ、運動をその中で波及させるという手法は、学生大衆自身が運動の過程で見出したものでした。しかし運動は、暴力装置を駆使した権力の秩序化策動によって、安定を回復した管理体系の前に封殺されました。そして、抵抗戦自体も目的意識化されませんでした（しかしこれは、何も学生大衆だけの責任ではありません。なにしろ他の誰も教示することができなかったから）。そして攻勢的段階に未だあるかのような認識が支配する中で、大衆運動は政策カンパニアの域を出なかった六九年秋から七〇年に至る過程で、暴力装置との対峙局面を構成し得ないままに（党派新聞の中では対峙局面にありましたが）、叛乱を疎外され、運動は自壊しました。（権力―当局―学生という構図は、大学当局―党派―学生という今日の学園秩序にそのまま引き写すことが出来ます。）

今日、存在する困難の一つは、攻勢段階という管理体系の動揺期に比して、つまり抵抗戦を強いられる管理体系の相対的安定期においては、管理体系の個別実体の認識以上に管理体系の綜体的認識が要請される点にあります。今日の秩序化され管理された学園においては、市民社会の現実と同様に、学生は個体としての分割を余儀なくされています。そして単子化され分断された個人は、発言の機会をまったく封じられてしまいました。そこでの個人はあくまで操作される対象でしかありません。確かに党派は、それに対して一定の形式を付与するものですが、党派組織への加入は大学当局からの操作からは一定程度離脱するものの、再び党派組織からする操作対象へと自己を移行するにすぎないのです。

管理体系の安定期において我々は、自らが操作可能な領域以上に操作されることの方がはるかに多いことを認識せねばなりません。パワーエリートは、自分たちだけが今日の社会に対する決定能力を有すると自負するわけですが、実際には今日の社会構造が彼らの存在と役割を要請し、また決定自体もすでに選択の幅を規定されたものにすぎないのです。そしてパワーエリートは、その本質としては非人称な、何時でも代替可能な存在として据えられているにすぎないのです。パワーエリートでさえ十全な操作主体でありえないのに、被支配階級が操作主体であり得るわけがありません。

党派が今日、叛乱への緩衝材としての機能を果たしているのも、このような理由にもとづきます。無自覚に体制に組み込まれていく程、たちの悪いものはありません。またこのような問題は、党派だけの問題とは限りません。例えば今日の、権力体系に無自覚な自治管理の主張や、小共同体の絶体視などを更にあげることもできるでしょう。それらは、党派が今日の運動水準が抵抗戦の段階にしかすぎないのにあたかも攻勢段階にあるかのように、あるいは空間的な対峙局面だけを想定しているように、想定された意図的な空間的ブロックが権力と対峙し得るかのように振るまうのです。少なくともそうした危険を孕んでいます。

今日のような国家独占資本主義段階においては、本来的な意味での自治管理は国家性と暴力装置に抵触することなく存在し得ません。もしあるとすれば、それは操作された「自治」管理にすぎない。それでもないよりましだというのであれば、あえて異論ははさみません。しかし、粗雑な党批判の立場自体が、党派が果たしてきた疎外的な役割

を決っして批判し尽し、それを克服したことにはならないことだけ述べておきたいと思います。

四　大衆運動の新しい展開

今日まで党をめぐる論争の多くは、党の存在が善であるのか、あるいは悪であるのかといった型での批判、あるいは擁護であったように思われます。そして、それらの論争は党存在のもつ機能と性格をめぐって、欠点と利点を、経験的に並置して争うというものでありました。かかる手法が一般に流布されていたボルシェヴィキの神話を打ち砕き、スターリン主義批判に効力を有したものであることは認められます。歴史の捏造に対して、かかる手法を介した事実の暴露が大きな効力を有したことと、批判がそれ自体で問題の解答にはなり得ないことは明らかです。

そして、原理的批判は形而下され（目的―手段論など確かに、かかる認識が全く無意味であるとは思いませんが、現実的契機を欠いたかかる論議はコロンブスの卵にすぎません）、また経験的批判は、大衆叛乱としての革命が如何に党によって裏切られてゆくのかというものでありました。結局、今日の党派が意味を失なっているのと同様に、党批判理論自体も現実的な機能をもってはいません。

この世に絶体的な善が存在しない以上、否定的立場も自らを葬ることとなく、自己を実現することはあり得ないのです。矛盾こそが、むしろ一般的法則であるとさえ言い得る世界で、矛盾を含まない立場があり得ると考えること自体が、あまりにも観念的な事柄なのでしょう。かかる観念操作から、目的にも手段にも矛盾を含まぬ組織論が構成されるといった逆立ちした立論が成形されるのです。問題の立論は、未来から現在が規定されるのではなく、むしろ現在の否定として未来を生み出さねばならないのです。未来からの逆規定は、それ自体としては観念上の任意的所産に他ならない以上、きわめて粗雑な操作によっていとも簡単に無数のモデルを生み出します。しかし、我々は現実の度し難き、そして許し難き矛盾と理不尽さにこそ、自らの変革の意志を置いているのです。自らの観念の王国のうえに、その無矛盾性に酔い、矛盾し錯綜した現実の体制の変革を断念する理念は、それだけで如何に抗弁しようともすでに社会主義とは無縁です。

さらに、無党派の大衆であろうと、きわめて党派的に振まうことがあり得ることだけは指摘しておこう。党派の人間でなくとも党派と同じに振るまえば、それだけで矛盾した存在となります。無自覚のうちに党派的に振るまってしまうことがあり得るし、あったのだと思います。従って、党派に属しているかいないかが、無党派と大衆を分かつ契機ではないのです。かかる反省の契機を失なった「無党派」の運動は、今日の党派の運動が辿ったと同じ顚末を歩むことになるのです。

今日のような管理体系の相対的安定期にあっては、政治的諸党派の無自覚で一方的に展開している革命的空語や主観的な情況認識が情況を切り拓くのではなく、抵抗戦を闘い抜く大衆運動のあり方が問われているのです。そして我々は、組織力の蓄積として問題をたてる以上に、運動の蓄積、階級形成、叛乱の継承として問題をたてなければならないのだと思います。